

紗那郵便局を解体した時に、見つかった半鐘（扱捉島）

二〇一五年六月九日に解体された紗那郵便局。その際、玄関向かって右側の地中から、煤と油にまみれた半鐘が布にくるまれた状態で見つかった。高さ五十センチメートルほどの半鐘には、外側から力が加えられて空いた穴があり、縦帯部分に「新合」の鋳型文字、背面に「第式拾四号 昭和六年六月」と刻まれている。それらを手掛かりに製造元などを調査したが特定できていない。



半鐘が見つかった場所

紗那郵便局玄関の向かって右側の地中に埋まっていた(2014年8月30日撮影)



鐘を吊すための龍頭のデザイン



半鐘上部左側面に大きな穴が。紗那の博物館職員によると、発見時は油と煤にまみれ、取り除くのに苦労したという



半鐘の内側は煤けたように見える



半鐘は現在、紗那の博物館に展示されている。左側の赤い梵鐘は、紗那にあった法伝寺付近の道路から発見されたもの。9年前、岩崎忠明さんがビザなし交流で訪問した際に博物館の倉庫に保管されているのを確認した(2016年5月撮影)



紗那郵便局を解体した時に、見つかった半鐘

(その二)

岩崎忠明さん

(紗那村出身)の話

「紗那警察署の脇に火の見櫓があった。今の電柱くらいの高さで、子供にとってかっこうの遊び場だったが、登ることは禁じられていた。櫓には消火用のホースがかけられていて、よく乾かすのに使っていた。櫓には、確かに半鐘があった。空襲とか、火事とか、訓練などの時には、ガンガン鳴る鐘の音を聞いた記憶がある。櫓があった警察署から郵便局までは三百メートルくらいはあるので、発見されたものが火の見櫓の半鐘だと、なぜ郵便局の地中に埋まっていたのか、疑問が残る」



半鐘が吊されていた紗那警察と、半鐘が地中から見つかった紗那郵便局は約300m離れている



紗那警察署の隣りに建物が出来ており、上の写真よりは新しいもの。櫓にはやはり半鐘が吊されている



(写真は公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟提供)

像・石碑等